

# ルカによる福音書

シリーズ～新約聖書入門～  
広島弁訳新約聖書

## 福音書が書かれた経緯

わたしたちの間で実現した事柄について、最初から目撃して御言葉のために働いた人々がわたしたちに伝えたとおりに、物語を書き連ねようと、多くの人々が既に手を着けています。そこで、敬愛するテオフィロさま、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、順序正しく書いてあなたに献呈するのがよいと思いました。お受けになった教えが確実なものであることを、よく分かっていただきたいのであります。〈ルカ1:1-4〉



# 福音書が書かれた経緯

わたしたちの間で実現した事柄について、最初から目撃して御言葉のために働いた人々がわたしたちに伝えたとおりに、物語を書き連ねようと、多くの人々が既に手を着けています。そこで、敬愛するテオフィロさま

イエス・キリストの弟子たちなど

イエス・キリストの誕生・公生涯・宣教・十字架の死・復活

9。〈ルカ1:1-4〉

# 福音書が書かれた経緯

わたしたちの間で実現した事柄について、最初から目撃して御言葉のために働いた人々がわたしたちに伝えたとおりに、物語を書き連ねようと、多くの人々が既に手を着けています。そこで、敬愛するテオフィロさま、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、順序たに献呈するのがよいと思いをいたしました。わたしたちになった教えることを、よく分かっていたたす。〈ルカ1:1-4〉

口伝伝承

マルコによる福音書  
など



# 福音書が書かれた経緯

本書の作成方法

福音書の宛先  
(ローマの高官?)

実現した事  
言葉のために働いた人々が  
わたしたちに伝えるとおりに、物語を書き連ね  
ようと、多くの人々が既に手を着けています。そ  
こで、敬愛するテオフィロさま、わたしもすべて  
の事を初めから詳しく調べていますので、順序  
正しく書いてあなたに献呈するのがよいと思い  
ました。お受けになった教えが確実なものである  
ことを、よく分かっていただきたいのであります。  
〈ルカ1:1-4〉

著作目的

# ルカによる福音書の特徴

- クリスマス・ストーリー
  - ルカはマリア経由の情報を入手していた
- 多くの“たとえ話”
  - “良きサマリア人”“放蕩息子”“ラザロと金持ち”他
- キリストによって始まる新しい歴史
  - 使徒言行録と一体である
  - イエス・キリストの誕生＞地の果て(ローマ)にもたらされた福音



# ルカによる福音書

～堀川寛による広島弁訳～

(広島弁訳の意味) (訳者の解説・蛇足)

## 第14章

安息日のことじゃった。イエス様はファリサイ派の議員の家に招かれて、食卓についちゃったんじやが、まわりの人らはイエス様が何かやらかすんじやないか、思うて見よった。そこには水腫をわずろうた人がおったんよ。(わざと座らせていた?)

イエス様はまわりにおける律法の専門家らやファリサイ派のものに言うちゃった。「安息日に病気を治すことは律法で許されとるんか、許されとらんのか?」

やつらはなんも言えんかった。イエス様は病人の手を取って病気を治し、その人を家に帰らしちゃった。ほいでこう言うちゃった。「あんたらの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日じゃけえいうて、すぐに助けちゃらんやつはおらんじやろうが!」やつらは、ぐうの音もでんかった。

イエス様は、食事に招待された連中が、勧められとりもせんのに上座に座ろうとするんをみて、たとえを話された。

「婚宴に招かれたら、上座に座っちゃあいけん。あんたよりも身分の高い人が招かれとってみんさい、宴会の責任者が来て、『すみませんが、こちらの方に席を譲ってつかあさい』言うじやろうが。そんなときあんたはメンツまるつぶれで、末席に座らにゃいけんようになる。招待を受けたら、末席を選んで座りんさい。そうしたら、宴会の責任者が来て、『もつと上座へ進んで下さい』言うてじゃけえ。そんな時にはあんたは、みんなが見とる前で、ちいたあええ格好ができようが。高ぶるもんはひくうされ、へりくだるもんは高められる。」

イエス様は招いてくれちゃった人にも言うちゃった。「宴会を開くときにはのう、友人も、兄弟も、親類も近所の金持ちも呼んじやあいけんで。そんならあは、あんたを招いてお返しせにゃあいけんじやろうがあ。宴会を開くときには、貧乏人やら、体の不自由な人やら、困つとる人らを招きんさい。そういうもんらあはお返しができるじやろう。ほいじゃが、そうしたらあんたは神様から本物の報いを受けることができるようになるけえのう。」

一緒に食事をしとったもの一人が突然イエス様に。「もし、神の国で食事ができたら幸せでがんしょうのう。」と言うた。

イエス様はたとえで答えちゃった。「ある人が盛大な宴会を催そう思うて、ようけの人を招いた。始まる時間になったけえ、召使いを行かして、招待客に、『準備ができましけえ、宴会に来てつかあさい』言うた。ほいじゃが招待客は次々に断ったんよ。最初の客は、『畑をこうた(買った)けえ、見に行かにゃあいけん。わりいが、こらえてつかあさい』言うた。他の客は、『牛を二頭ずつ五組こうたけえ、その様子を見に行くところなんよう、わりいが、こらえてつかあさい』言うた。また別の客は、『こないだあ(先日)嫁さんをもろうたばっかりじゃけえ、行かれんですわあ』言うた。召使いは帰ってこのことを主人に報告した。ほしたら主人はブチ怒って、召使いにこう言うた。『急いで町の広場や路地へ出て行って、貧乏人やら、体の不自由な人やら、困つとる人らを連れてきんさい。』ちいとたつてから召使いが、『ご主人様、言われたとおりにしましたが、まだ席があいとります』言うた。主人は、「ほいじゃあ、町中くまなく捜して、誰でもええけえ、無理にでも連れてきて、この家を一杯せえ。ええかあ、最初に招待した連中は、わしが用意するご馳走を誰一人食べられんのんじやけえのう。』」

(このたとえ話では、最初に招待された人々はユダヤ人や、あとから連れてこられた人々は異邦人を表していると考えられます。ユダヤ人はイエス様から最初に神の国の宴会に招待されたのですが、それを拒み、宴会にありつけませんでした。しかし異邦人は後からやや強引に招かれながらも、神の国の宴会にありつけたのです。)

ようけえ(大勢)の人らあがついてきたんじやが、イエス様は振り向いて言うちゃった。「あんたら、わしについてきたい思うとるんかもしれんが、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹、更に自分の命じやろうとこれに執着しとるようなもんは、わしの弟子にはなれんでえ。自分の十字架を背負うてついて来るもんじやなけんにゃあ、わしの弟子とは呼べん。」

あんたら、家を建てよう思うたら、まず金が足り取るかどうか、腰を据えて計算するじやろうが。そうせにゃあ、基礎を作っただけで終わってしもうて、『あんなは(あの人は)家を建て始めたのはええが、基礎で終わってしもうたのう』いうて笑われるんがおち

じゃ。どんな王さんでも、二万の兵で進軍してくる来る敵を一万の兵で迎え撃たにゃいけんようになったら、まずはよう考えるじゃろう。ほいで、勝ち目がないう思ったら、まだ敵がこんうちに、使者を送って和睦を求めんじゃろう。それと同じよう。わしの弟子になりたいんなら、まずよう考えんさい。少なくとも、自分の持ち物を全部捨てんにゃあ、わしの弟子にはなれんのじゃけえのう。」

「塩は生きていくのに必要なもんじゃ。ほいじゃがもし塩から塩味がのうなったら、どうやって塩味をつけたらええんな？ただの白い粉なら何の役にも立たんけえ、捨てられるだけじゃ。あんたらもそうならんように気いつけんさいよ。」

## 第15章

徴税人や罪人(律法で禁じられている職業に就いていた人)らが、話を聞こう思うて、イエス様のねき(近く)へ寄ってきた。ほしたら、ファリサイ派の連中やら律法学者らが、「こんなあ見いや。罪人らと一緒に食事しようでえ(当時、まじめなユダヤ人は罪人と食事をしなかった)」言うてカバチをたれた(文句を言った)。そこで、イエス様はたとえ話をしちやった。

「あんたらの中に、百匹の羊をこうとる(飼っている)もんがおって、そのうちの一匹でもおらんようになったら、九十九匹は残したまんま、おらんようになった羊を見つけるまで捜し回るじゃろうが。ほいで、見つかったら、大喜びでその羊を肩に担いで、家に帰ったら、友達やら近所のもんらを集めて、『おらんようになった(いなくなった)羊を見つけたけえ、一緒に喜んでつかあさい』言うじゃろう。よう言うとかでえ。心を入れ替えんでもええ思うとる九十九人なんかより、罪人が一人でも心を入れ替えたら、天では大喜びが巻き起こるとるでえ。」

「一万円札を(オリジナルはドラクメ銀貨/約1万円)十枚貯めとる女がおったとしようか。もし一枚でも無くしてみんさい、蠟燭をつけて、家の隅々まで掃除して、を見つけるまで必死で捜すじゃろうが。ほいで見ついたら、友達やら近所の女連中を集めて、『無くした万札を見つけたけえ、一緒に喜んでつかあさい』言うじゃろう。よう言うとかでえ。罪人が一人でも心を入れ替えたら、天では大喜びが巻き起こるんどう。」

また、イエス様はこうも言うちやった。「ある人に二人の息子がおったとしよう。弟の方がガンボたれ(わがまま)で父親に、『オヤジ、わしがもらうことになつとる財産の分け前をくれえやあ』言うた。気前のエエ父親は、財産を二人の息子に分けてやった。何日もたたんうちに、弟は財産をぜ〜んぶ金に換えて、都会へ出て行き、そこで遊びほうけて、あつという間に財産を使い果たしてしもうた。なんもかんものうなつたとき、運のわりいことに、ひどい飢饉が起こつて、食べるもんも手に入らんようになった。それで、田舎に行って、誰か助けてくれんかあ思うてうろろしよつたら、豚の世話をするんなら、言うてやとうてもろうた。(豚はユダヤ人にとってもっとも汚れた動物)弟はブチ(非常に)腹がへつとつたけえ、豚のえさでも食いたかつたんじゃが、誰も食べもんをくれる人はおらんかつた。そこでようやく弟は我に返つてこう言うたんよ。『オヤジのところにゃあ、雇い人がようけいおつて、有り余るほど食いもんがあるのに、わしゃあここで飢え死にしそうじゃ。こつから出て、オヤジのところへ帰って言おう。「オヤジ、わしゃあ天の神さんに対しても、オヤジに対しても取り返しのつかんことをしました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてつかあさい」と。』ほいで弟はそこを出て、オヤジのところへ向かつて行つたんよ。ところが、家からはえろう(たいそう)離れとつたのに、父親は息子を見つけて、かわいそうにおもうて、走り寄り、抱きしめて接吻したんよ。息子は言うた。『オヤジ、わしゃあ天の神さんに対しても、オヤジに対しても取り返しのつかんことをしました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』ほいじゃが父親は雇い人らに言うたんよ。『はよう(急いで)一番エエ服を持ってきて、この子に着せてやってくれえ。指輪をはめて(息子の証拠)、履き物を履かせてやってくれえ。ほうじゃ、よう肥えた子牛を引いてこい。食べて祝おうじゃないか。この子は、死んどつたのに生き返り、おらんようになつとつたのに見つかったんじゃけえ。』ほいで、宴会を始めたんよ。

ところが、兄貴は畑で働きよつたんじゃが、家の方から、音楽やら踊りの声やらが聞こえてきた。そこで、雇い人を呼んで、こりゃ一体何の騒ぎなんならあ、言うて尋ねた。雇い人は、『弟さんが帰ってきちやつたんです。ご無事じゃつたけえ、お父上が肥えた子牛を屠つていおう(祝う)とつてです。』兄貴はブチ怒つて家の外ではぶてとつた(むくれていた)けえ、父親が寄つてつてなだめた。ほいじゃが、兄



貴は父親に言うた。『オヤジ、あんまりじゃないか。わしゃ何年も身を粉にしてオヤジのために働いてきた。言いつけに背いたことは一度もありやせん。それなのに、わしが友達と宴会するいうても、子羊一匹くれんかったじゃないか。ところが、あんたのあのバカ息子が、娼婦に入れあげてあんたの身代を食いつぶして帰って来たのに、肥えた子牛を屠ってやるんか!』すると父親は言うた。『まあ聞けえ。おまえはわしと一緒にいる。わしのもんはぜんぶお前のもんじゃ。ほいじゃが、お前の弟は死んどったのに生き返り、おらんようになったのに見つかったんじゃ。宴会を開いて喜んでやってもええじゃないか。』

## 第16章

イエス様は、弟子たちにこうも言うちゃった。『ある所に金持ちがおったんじゃが、管理人の一人が主人の財産を使い込んだる、言うて告げ口するもんがおった。そこで、主人はその管理人を呼びつけて、『おまえは使い込みをやっとるらしいじゃないか。はあ(これ以上)お前に管理は任せられん。収支報告を出さんか!』管理人は考えた。『こりゃ困ったのう。管理の仕事は首になりそうじゃ。土方をする力もないし。物乞いをするんも恥ずかしいし。ほうじゃ、こうしよう。首になってもわしを家に迎えてくれるもん(者)らを作りやえんじゃ。』そこで、管理人は主人の財産を借りとるもんらを一人ずつ呼んで、最初の人に、「あんたあ、わしの主人からなんぼ借りとんなあ」言うた。『油百樽です』言うた、管理人は、『ここにあんたの証文がある、急いで五十樽に書き直しんさい。』また別のの人に、『あんたはいくら借りとるんなあ』言うた。『米百俵です』言うた、管理人は、『ここにあんたの証文がある。八十俵と書き直しんさい。』主人はこれを聞いて、このわりい(悪い)管理人のずる賢いやり方をほめたんと。やり方はいけんが、目の付け所がえかった(良かった)けえじゃ。

よう聞いときんさいよ。そもそも富は汚れたもんじゃ。ほいじゃけえ、これで友達を作りんさい。そうすりゃあ、金がうなったときに、その友だちがあんたらをやしのうて(養って)くれるじゃろう。小さいことに忠実なもんは、大きいことにも忠実じゃ。小さいことに不忠実なもんは、大きいことにも不忠実じゃ。ほいじゃけえ、この世の汚れた富に忠実じゃないもんに、どうしてホンマに価値のあるもんを任せらりょうか。人のもんに忠実じゃなかったら、どうしてあんたら自身のもんを(神様は)与えてくりょうか?

どんな召使いでも、二人のご主人様に同時に仕えることはできん。一方を好いて他方を嫌うか、一方を重んじて他方を軽んじるかどっちかじゃ。それと同じように、あんたらは神様と金様に同時に仕えることはできん。」

金に汚いファリサイ派の連中が、この話を聞いて、イエス様をあざ笑ったげな。そこでイエス様は言うちゃった。「おまえらは自分の正しさを人にみせびらかしようが、神様はおまえらの心をお見通しなんでえ。律法と預言者(旧い契約)の時代は(バプテスマの)ヨハネの時に終わったんじゃ。今は(新しい時代が到来して新しい契約である)神の国の福音が告げ知らされとる。誰もがそこに入りたがるのはあたりまえじゃろう。ほいじゃが、律法の文字の一画がなくなるよりは、天地が消え失せる方がみやすい(易しい)んでえ。(旧い契約が破棄されたわけではない)(正当な理由なく)妻を離縁して他の女と結婚するもんは、姦通罪をおかすことになる。離縁された女を妻にするもんも同罪じゃ。」

「ある所にえらい金持ちがおった。いっつもエエ服を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしよった。この金持ちの家の前に、ラザロいうできもんだらけの物乞いころがとった。ラザロは金持ちの食卓から落ちるもんでもええけえもらえんかのう思うとった。野良犬もラザロを憐れに思うて、できもんをなめてやりよったんと。しばらくして、この貧乏人は死んで、天使に伴われて天国のアブラハムの宴席に連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。ところが金持ちは陰府(地獄)に落とされ、苦しみながら目をあげると、アブラハムのふところに抱かれて宴会に連なっているラザロが、遠くに見えた。そこで金持ちはおらんで(大声で)言うた。『父アブラハム様、わしを憐れんでつかあさい。ラザロをこっちへこらして、指先を水に浸し、わしの舌を冷やさしてくれんですか。わしはこの炎に焼かれてやれんのんです(たまりません)。アブラハムは言うた。『子よ、思い出してみい。お前は生きとる間は(目の前で苦しんどるラザロを無視して)自分だけええ思いをしたが、ラザロは反対にひどい目に遭い続けた。ほいじゃけ、ラザロはここで慰められ、お前は苦しみ続けるんじゃ。それだけじゃないでえ。わしらとおまらとの間には大きな淵があつてのう、そっちへ行こう思うてもできんし、そっちからこっちへ来ることもできんのよ。』

金持ちは言うた。「父アブラハム様、ほいじゃあお願いです。わしのオヤジの家にラザロを行かしてつかあさい。わたしには兄弟が五人おります。あんならに、こんな苦しい場所にこんように、言うて聞かしてやってつかあさい。』アブラハムは言うた。『お前の兄弟らあは聖書を持つとるじゃろうが。聖書の言葉通りにしとりゃええだけじゃ。』金持ちは言うた。『いえいえ、父アブラハム様、もし、死んだもんが生き返って兄弟のところに行ったら、あいつらあも心を入れ替える、思うんです。』アブラハムは言うた。『もし、聖書の言葉に耳を傾けんのんなら、たとえ死者が生き返っても、そのもん(者)の言うことを聞きゃあせんじゃろう。』』